



いざ、実力の進化へ

—令和5年度旅団演習—



第14旅団(旅団長 大場剛陸将補)は、9月下旬から10月中旬までの間「令和5年度旅団演習」を実施した。

本演習は、西部方面総監(山根寿一陸将)を統裁官として島嶼部における一連の行動のなかで「任務の継続性」の確保について評価を受けるとともに、併せて5個部隊に対し訓練検閲を行うものであり、配属協同部隊を含め一丸となった増強第14旅団が演習場に集結し、旅団長以下バトラーを装着して実戦に近い状態で臨む、旅団として今年度最大規模の訓練である。

旅団は当初、与えられた任務を図上演習(シミュレーション)により検証するとともに、実力を更に進化させるための幾つかの課題を明らかにし本訓練に臨んだ。

実動演習では、9月下旬より逐次、訓練部隊が四国内のそれぞれ駐屯地を出発し陸路・海路を使用した機動展開により日出生台演習場(大分県)に進出した。

配属・協同部隊を掌握した増強第14旅団は、敵特殊部隊や偵察衛星等を相手に、旅団長の「一分散・偽装・欺騙・警戒の徹底により必ず生き残り」を実践するため築城、分散、小移動等により部隊が健在しつつ如何に任務を遂行するか、それぞれ指揮官が脳しようを絞り阻止準備を概成させた。

10月中旬、敵の猛烈な事前射撃が始まり、空路からの敵の攻撃・侵入を防ぐため高射特科部隊は対空戦闘を繰り返し、降着した敵に隊により砲迫火力を発揚するとともに、第一線部隊による本格的な阻止戦闘が始まった。

旅団は、任務を継続するため、抗堪性を確保することを主眼として予備陣地の構築を継続しつつ、負傷隊員を空輸等により後送するとともに敵の化学攻撃に対し汚染地域の偵察、地域の安全化を図った。



発行所
第14旅団

司令部
総務課広報班

特別号

Pick up!

本演習には、9月に配置されたばかりの新隊員も参加した。初めて経験する長期の野外訓練、体力が底を尽きるまで夜通し行われる陣地構築作業、容赦なく繰り返される敵特殊部隊の襲撃に困難な状況を極めたが、歯を食いしばり先輩隊員の背中を追いかけた。ながら一生懸命任務に打ち込む隊員の表情が印象的であった。

半年前まで、銃の持ち方さえも知らなかった新隊員は、装具を身につけ我が身や仲間を守るために銃を扱う立派な陸上自衛官へと成長した。

今年度入隊、9月に部隊配置された新隊員も訓練に参加



重傷者(ダミー)の処置を行う隊員
(写真:右)



旅団指揮所構築を行う隊員



施設防護部隊として編成され警戒を行う隊員



野外において損耗した装備品の溶接を行う隊員



重症者9名の緊急患者空輸



スカイレンジャーによる偵察活動



敵車両を狙う無反動砲手



民間船を活用した海上機動
(第15即応機動連隊)



陸上機動(瀬戸大橋)
(第14偵察隊)



戦闘指導を行う旅団長



旅団指揮所の構築作業を行う隊員
(第14施設隊)



除染活動のための調整
(第14特殊武器防護隊)



通信の維持・運営
(第14通信隊)



昼夜を分かたず旅団指揮所を構築
(第14施設隊)

講評及び優秀隊員の表彰

旅団長は、善通寺駐屯地において、第15即応機動連隊及び第14後方支援隊に対して、日出生台演習場において、第14施設隊、第14通信隊及び第14特殊武器防護隊に対して、本訓練検閲での講評及び功績のあった隊員に対する表彰を行った。



第15即応機動連隊（連隊長 徳淵文雄 1等陸佐）



第14後方支援隊（隊長 佐藤欣央 1等陸佐）



第14施設隊
（隊長 吉田正幸 2等陸佐）



第14通信隊
（隊長 小野田怜 2等陸佐）



第14特殊武器防護隊
（隊長 西原清隆 3等陸佐）



優 秀 隊 員

第14特殊武器防護隊
陸士長 宮下 小雪

第14通信隊
1等陸尉 畦田 正樹
2等陸尉 小谷 祥平

第14施設隊
陸曹長 岡崎 和也
3等陸曹 川原 稜裕

第14後方支援隊
2等陸曹 松林 洋史
3等陸曹 大本 拓実
3等陸曹 林 亜由乃
3等陸曹 網矢 龍彦
2等陸曹 中本 貴能
3等陸曹 林 大和
2等陸曹 金子 雅範
1等陸曹 橋本 直也

第15即応機動連隊
3等陸尉 久保 蘭靖
3等陸曹 川口 哲弘
2等陸曹 大 林 信也
2等陸曹 畑 山 亮
3等陸曹 英 玲緒
陸曹長 角 昭治
3等陸曹 山本 代一
2等陸曹 川崎 将尚
2等陸曹 末松 烈